

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02639

研究課題名(和文) 儀式唱歌が作った子どもの心と身体 勅語奉答歌を中心とした歴史的・社会学的研究

研究課題名(英文) The Mind and Body of Children Built up by Ritual Chants -Historical and Sociological Study Centering on the Ritual Chant Chokugo-hoto -

研究代表者

嶋田 由美 (SHIMADA, YUMI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：60249406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1893年の「祝日大祭日歌詞並楽譜」告示以降の学校儀式における儀式唱歌の扱いを教育書や教授細目等の史資料により整理した。そして勅語奉答歌に焦点を絞り、告示の《勅語奉答》(勝安芳作歌)とともに中村秋香作歌の《勅語奉答》も指導されたこと、歌詞の難解さや指導のしやすさが扱いの際の観点であり小学校においては中村のものが扱われる傾向にあったが、国民学校期に入ると次第に告示の《勅語奉答》に移行する様相を明らかにした。一方、聞き取り調査からは鮮明な勅語奉読時の記憶に比して《勅語奉答》を歌唱できた人は僅かであり、勅語奉読後の《勅語奉答》唱和は他の儀式唱歌ほどには徹底されていなかったと考察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は学校儀式における儀式唱歌の中でも特に《勅語奉答》に焦点をあてて、告示の《勅語奉答》以外の同種の曲を考察するとともに、教授書や小学校教授細目の分析から儀式に扱う際には告示のもの、および中村作歌の《勅語奉答》のいずれかを選択する傾向にあったこと、選択の際には告示のものか否か、あるいは曲の難易によるかなどが観点とされたこと、国民学校期に入ると次第に告示のものに移行する傾向にあったことを明らかにした。また聞き取り調査からは、《勅語奉答》を指導された方々は少数であったが、今日に至ってなお明確に歌唱できることが認められ、そこから今後の儀式歌の在り方を考える示唆が得られた。

研究成果の概要(英文)：In this study, the usage of ritual chants in school ceremonies after the public notice of "Lyrics and Musical Scores for National Holidays" in 1893 was organized based on historical materials such as educational books and teaching details. Focusing on the Ritual Chant "Chokugo-hoto," the study clarified that along with the ritual chant publicly noticed (made by Katsu Yasuyoshi), the chant by Nakamura Akika was also taught, and that due to its ease of lyrics and teaching, Nakamura's chant tended to be introduced to elementary schools but they shifted the chant gradually to the chant publicly noticed when the national school period began. From our hearing survey, the singing of the Ritual Chant "Chokugo-hoto" after the reading of the Imperial Rescript on Education was considered to be not thoroughly taught unlike other ceremonial chants because very few people could sing the ritual chant, while many people clearly remembered the reading of the Imperial Rescript on Education.

研究分野：音楽教育史

キーワード：学校儀式 「祝日大祭日歌詞並楽譜」 《勅語奉答》 聞き取り調査 式次第 儀式唱歌 学校文書

1. 研究開始当初の背景

戦前の唱歌教育の実態や儀式における唱歌の扱いに関しては、本多佐保美らのグループによる国民学校期を過ごした人々への聞き取り調査も交えた研究をはじめ、いくつかの研究成果が報告されているが、それらは限定された地域における聞き取りによるものや、国民学校期に絞られるなど対象期間についても比較的、限定的なものが多い上に、儀式唱歌に焦点があてられた聞き取り調査の成果は見られなかった。とりわけ戦前の学校教育で「国の基」と位置づけられた教育勅語奉読に関連する勅語奉答歌そのものを、文献と聞き取りによって複層的に考察した研究はこれまで皆無に等しかったと言える。しかしながら、1891年に「小学校祝日大祭日儀式規定」が公布されるとその2年後には「祝日大祭日歌詞並楽譜」(全8曲)が告示され、その後、50余年にわたって学校儀式が儀式規定と儀式唱歌に則って行われるべきとされていたことを考えると、学校儀式における唱歌の扱い、さらにはそのための唱歌教育実践の様相を儀式規定制定の時期に遡って明らかにする必要があると考えられた。

加えて、戦前に学校教育を受けた世代からの聞き取りの機会が今後、ますます消滅していくことを考慮すると、当時の学校儀式やそこで唱和された儀式歌、そして儀式を立派に執行するために準備された唱歌教育にまつわる人々の記憶を、この時点で可能な限り人々の語りから残していくことの意義は大きいと推察された。

本研究はこのような研究開始当初の唱歌教育史研究の状況から、儀式唱歌制定以来、学校儀式における儀式唱歌の扱われ方の変遷を教育書や管理法書、学校日誌や教授細目等の史資料により明らかにするとともに、特に勅語奉答歌について戦前期に学校生活を過ごした世代への聞き取りの分析を交えながら、学校儀式におけるこの歌の扱いと指導された子どもの心に残されたものを解明していくことを企図した研究である。

2. 研究の目的

「研究開始当初の背景」でも記したように、本研究ではまず、「小学校祝日大祭日儀式規定」制定の2年後に告示された「祝日大祭日歌詞並楽譜」の各曲の中でも特に《勅語奉答》に焦点をあてて、この歌とその後、作成された多くの類歌の学校教育における扱われ方の趣旨や変遷を教育書や教授細目から明らかにすることを研究の第一段階と位置づけた。通史の中で学校儀式における儀式唱歌の扱いが述べられることはあっても、《勅語奉答》という曲に特化した研究はこれまでに見当たらない。しかし、昨今の教育を取り巻く様々な環境を考えると、儀式の中でこの曲がどのように位置づけられてきたのか、この曲に求められた役割などについて明らかにすることは必須の課題と考えられた。

一方、「祝日大祭日歌詞並楽譜」告示以降、昭和前期までの期間の音楽教育を俯瞰すると、唱歌教育自体が学校教育に位置づけられるまでに時間を要したことや唱歌教育を推進し得る教師の能力の問題などの様々な背景により、文献に記載されたことが必ずしも唱歌教育や儀式の実態とは言えない状況も十分に考えられた。つまり、実際にどのように儀式の中で儀式唱歌が唱和され、そのためにどのように唱歌教育が準備されていたのかについては、人々の記憶の語りから補完的に考察する必要性が考えられた。もっとも研究者が現時点において直接的に聞き取りを行える対象者は昭和前期の尋常高等小学校もしくは国民学校に在籍していた世代に限定される。しかしながら今後、これらの方々への記憶が語られる機会も消滅していくことを考えると、早急な聞き取り調査を実施し、記憶の語りを文字として残し、それらを文献調査による記録と複層的に考察すべき時期に至っているのではないかと考えた。

このような趣旨から開始された本研究ではこれまで重点的に研究対象とされてこなかった《勅語奉答》の学校儀式での扱いの変遷の様相を明らかにするとともに、それらの歌がどのように当時、小学校や国民学校生活を送った人々に記憶されているのか、当時の子どもは《勅語奉答》をどのように受け止めたのかを考察し、儀式歌の役割について明らかにすることを目的とした。

この研究から得られた成果は、これまでの音楽教育の在り方を振り返るとともに、今後、学校教育の中で芸術教科としての音楽とどのように向き合っていくべきか、音楽によりどのような子どもを育てていくべきか、さらには儀式における歌唱のための音楽指導の在り方について多くの示唆を得ることができると考えた。

3. 研究の方法

本研究は史資料調査と高齢者への聞き取り調査の双方の研究手法を駆使したものとなった。文献調査では「小学校祝日大祭日儀式規定」制定以降の教授書、管理法書類、あるいは、教授細目や学校日誌、学校史などを可能な限り収集し、そこから儀式次第や儀式唱歌に関連する記録を採り上げ分析を行った。そのためには国立国会図書館をはじめとするこれまで多くの研究者によって調査が行われてきた図書館や文書館のみならず、地方の公立図書館や公文書館の文書類の調査、また明治～昭和前期に刊行された諸種の教育および音楽関係雑誌の調査に多くの時間が費やされた。さらに小学校に保管されている学校日誌類に、儀式次第や実際の勅語奉答歌に関連する記載が残されているケースが僅かながら確認でき、それらは本研究の推進に重要な資料

となった。

一方、高齢者への聴き取り調査に関しては、2020年度以降のコロナ禍の影響があり、追加調査の機会などが得られなかったが、研究初年次および2年次において精力的に聴き取り調査を行った結果、総計で100名を超える高齢者から儀式や当時の唱歌教育全体に対する回想の語りを得ることができた。地域的には聴き取り対象者の居住地は北海道から沖縄にまでにわたり、さらには樺太、満州、台湾といった外地で小学生時代を過ごした方々からも僅かではあるが証言を得られた。聴き取りにあたっては研究者らの所属学会の倫理規定に則り、高齢者に対しての様々な配慮もしながら時間をかけて丁寧に行い、その後録音データから文字起こしを行った。またこれらの記憶を論文に資料として使用するにあたっては、文章化したものを対象者に事前に確認して頂き了承を得る等の手続きを踏んで研究を推進した。

4. 研究成果

(1) 式次第そのものにおける勅語奉答歌の扱いについてまず、教育書や学校管理法書から《勅語奉答》の式次第への位置づけを検討し、《勅語奉答》についての言及の推移を考察した。その結果、《勅語奉答》の奉唱が研究対象期間中に一貫して勅語奉読に続く必須のものとして位置づけられていたわけではなかった様相が認められた。

(2) 1890年代には雑誌記事などに開校式等の行事に際し関連する唱歌が披露された記事がみられた中で、1890年の「教育勅語」渙発以降は、歌本に加えて雑誌でも多くの勅語関連の唱歌が掲載されたことを明らかにした。1891年8月までに発表された勅語関連唱歌は歌詞だけであったが1891年9月以降には曲も付されるようになっていたことから、この頃になると作曲家、作曲者ともに一体となって勅語関連の唱歌を作り出していったことが認められた。そして法令中の式次第から《勅語奉答》等の奉答歌に関する記載が省かれたことや文部省が勅語関連の各種の唱歌を認可したこともあり、その後、勅語奉答歌そのものを歌唱しない、あるいは他の関連唱歌を用いるなど、式次第における勅語奉読のあとの儀式唱歌の扱いが紀元節や天長節などの他の儀式より緩やかになっていくことが認められた。

(3) 上記(2)に記した「祝日大祭日歌詞並楽譜」所載の《勅語奉答》以外の勅語関連唱歌に関しては、教育書や唱歌教授細目に曲名が見られるものとして、『小学唱歌』巻之五に掲載された《教育勅語拝読之歌》、「祝日大祭日歌詞並楽譜」と同名の《勅語奉答》として中村秋香作歌・小山作之助作曲、佐々木信綱作歌・納所辨次郎作曲、佐々木信綱作歌・田村虎蔵作曲のものなどの存在を明らかにし、それらの代表的な勅語奉答歌を取り上げ、歌詞および楽曲の面から特徴を考察し、同時に教育現場での受け止め方についても教育書等の言説から明らかにした。

(4) 1890年代はじめから国民学校期に至る間に各地で編纂された小学校唱歌教授細目約100種を分析した結果、教授細目中に儀式唱歌が編成されない細目が見られたこと、注記の形で儀式唱歌指導の必要性が記載されたものもあったこと、勅語奉答関連の唱歌名が見られる場合には告示の《勅語奉答》は高学年に編成される傾向があったこと、告示の《勅語奉答》以外には、「あな尊しな」の曲頭歌詞を持つ中村作歌の《勅語奉答》が教授細目に編成される場合が多く見られることが明らかとなった。

(5) 教授細目に編成された勅語奉答歌の多くは告示の《勅語奉答》および中村作歌の《勅語奉答》のいずれかに分類されるが、この2曲を巡っては、選曲の際に曲の難易、あるいは告示か否か等の様々な側面が考慮されていた様子が教育書や教授細目中の記載から明らかになった。

(6) 学校日誌の記載事項から、1941年に入るとそれまで中村作歌の《勅語奉答》を儀式に用いていた小学校で、告示の《勅語奉答》に変更する動きがあったことが明らかになった。例えば、長野県の事例では開智小学校が東京音楽学校から招へいた講師による音楽講習会の直後の学校儀式から「正式ノ奉答歌」に変更をした旨の記録が残されており、官立学校による何等かの指導が働いたのではないかと推察された。その背景には、1937年の文部省図書監修官、各務虎雄による「祝日祭日に歌ふ『勅語奉答』の歌は、この『あやに畏き』(筆者注：告示の《勅語奉答》)であるべき」という発言と、国民学校期という時代背景があったと考察された。

(7) 本研究を推進する中で、儀式唱歌として作成されたものではないが、終戦までにもう少し期間があれば学校儀式の中に位置づけられていった可能性のある唱歌の存在が史資料と聞き取り調査の結果、明らかになった。それは大政翼賛会が作成した《御民われ》である。国民学校期に使用された『初等科音楽 四』にも同名異曲の《御民われ》が掲載されていたが、1943年に大政翼賛会が発表した《御民われ》が唱和された様子が一部の学校日誌の儀式関連記事や、聴き取り調査の語りから明らかになったことは、本研究によって得られた新たな知見であり、今後、同じような扱いを受けた《海行かば》と同様に儀式歌に準ずるものとして研究を進めていく必要がある。

(8) 本研究の推進過程において約100名の戦前に小学校あるいは国民学校で教育を受けた高

齡者への聴き取り調査を行った。その多くは戦前の学校教育で指導された歌、儀式で唱和した歌として《海行かば》などの記憶を語ったが、中には当時から約90年を経て再び聞く中村作歌《勅語奉答》の音源に合わせて即時に歌唱したケースも見られた。この他にも僅かではあるが告示あるいは中村作歌の《勅語奉答》を歌唱できた高齢者も見られたが、そこからこれらの奉答歌を儀式で唱和する際にはおそらく徹底した歌唱指導が行われたであろうことが推察された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子	4. 巻 第7号
2. 論文標題 2種の儀式唱歌《勅語奉答》をめぐる論考 小学校唱歌教授細目から読み解く教育現場での《勅語奉答》の扱い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学・教育実践論叢	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子	4. 巻 第64号
2. 論文標題 儀式唱歌《勅語奉答》の位置づけ 式次第と《勅語奉答》への言及に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 161-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 嶋田由美	4. 巻 6
2. 論文標題 「F.ジルヒャー作品と音楽教育 明治期から戦後期に至る唱歌集・教科書掲載曲と指導書の分析を通して」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『教育学・教育実践論叢』	6. 最初と最後の頁 143-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 882
2. 論文標題 音楽文化から見る日本近代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『明治150年を問いたず』2018地理歴史教育7月増刊号	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤富美子・伊野義博・権藤敦子	4. 巻 第21号
2. 論文標題 パネルディスカッション報告：音楽教育の原点をとらえる フォークロアの現代的意義から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育史研究	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋田由美	4. 巻 23
2. 論文標題 国民学校の子どもと大政翼賛会制定《御民われ》 指導の実態解明に向けた記録と記憶に基づく考察の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育史研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権藤 敦子、嶋田 由美、有本 真紀	4. 巻 2
2. 論文標題 《勅語奉答》と唱歌教育：雑誌記事を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/51600	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 927
2. 論文標題 卒業式歌・卒業ソングの同時代史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 120～125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子
2. 発表標題 儀式次第にみる《勅語奉答》の位置づけ 儀式唱歌が作った子どもの心と身体（ ）
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 戦前の子どもが語る《勅語奉答》《海ゆかば》の記憶 儀式唱歌が作った子どもの心と身体（ ）
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 儀式規定・儀式唱歌の制定と「正しく歌う」唱歌指導 儀式唱歌が作った子どもの心と身体（ ）
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 権藤敦子
2. 発表標題 近代日本の学校音楽教育における民俗の視線（パネル提案）
3. 学会等名 音楽教育史学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本音楽教育学会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 『音楽教育研究ハンドブック』嶋田由美「文化史としての音楽教育」・有本真紀「社会集団と音楽教育」・権藤敦子「歴史からみる音楽教育」「音楽教育理念と実践の史的展開」	

1. 著者名 神代健彦・藤谷秀編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 はるか書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 『悩めるあなたの道徳教育読本』有本真紀「音楽教育の成り立ちと道徳」	

1. 著者名 嶋田 由美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 276
3. 書名 唱歌教育の展開に関する実証的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	有本 真紀 (ARIMOTO MAKI) (10251597)	立教大学・文学部・教授 (32686)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	権藤 敦子 (GONDO ATSUKO) (70289247)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関